



松本勇生
多幾山研究室

ヒト・モク交差点

敷地：東京都あきる野市

用途：製材所・食堂・他

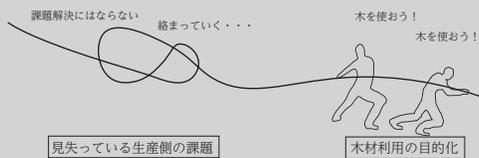


はじめに

木材利用の目的化、その背景にある生産と利用の乖離に焦点を当てた卒業設計である。東京都あきる野市の山あいを敷地として、川上から木材利用を再構成する拠点を提案する。林業の町の玄関口であり、丸太が製材されその姿を変えるこの施設は、ヒトとモクが行き交う空間として、これからの木材産業をつくり出す。

木材利用の目的化

持続可能性を求めらる中で「積極的に木材を使うこと」が社会的テーマとなっている。しかし時に、木材を使うことのみが独り歩きし、目的化していることに違和感を感じる。伐期を迎えた沢山の樹木たち、規格から外れた個性的な丸太、林業の衰退、森林機能の喪失。これら生産側の課題に目を向けた木材利用が本来目指す方向ではないか。



見失っている生産側の課題

木材利用の目的化

利用側から引っ張るだけの木材利用では、課題は解消されず絡まっていく一方...

生産と利用の乖離

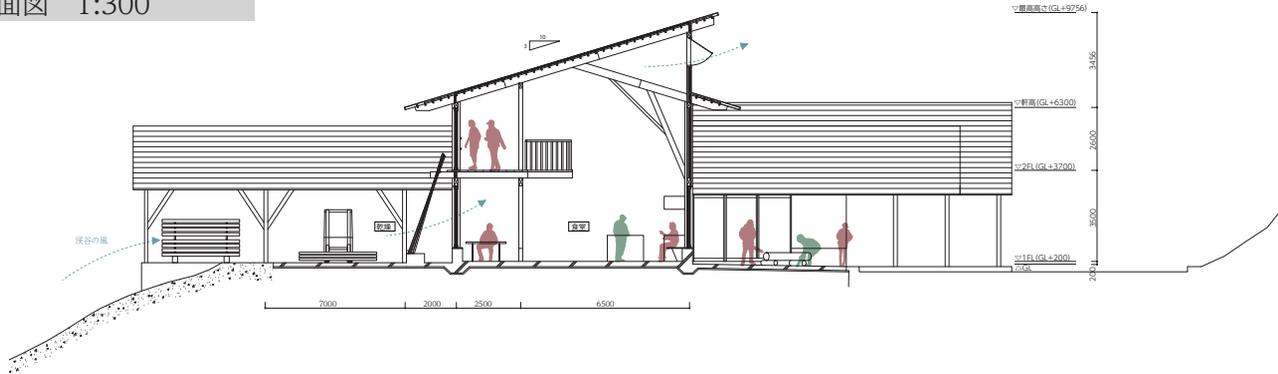
木材利用の目的化の背景に目を向ける。木材産業は細かく分業化されており生産側と利用側が直接関わる機会が少ない。また、人が少ない山奥で行われることがほとんどであり、林業は都市から孤立している。これにより、利用者側が主体となった産業が発展し、「つかうこと」に意識が向けられるのである。



関わりの希薄化・産業の孤立



東西断面図 1:300



敷地 1:4000

東京都あきる野市

多摩地域は古くから大都市江戸（東京）の発展を支え、そして支えられて成長した。

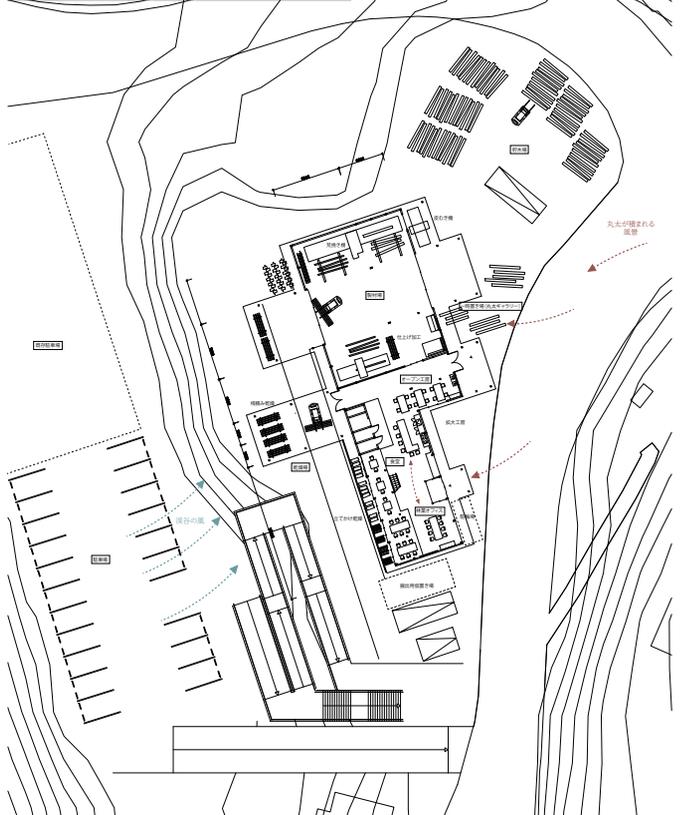
一大市場を支える生産地でありながら、現在は補助金により山が回っているのが現状である。

これからの木材生産の在り方をこの多摩地域に提案することで改革を図る。

敷地は市街地はずれ、林業の町の玄関口に位置する。山の中で製材を行う合理性と、これから山へと入る観光客に対し、林業の町の風景を提示することで観光の意識を変える。



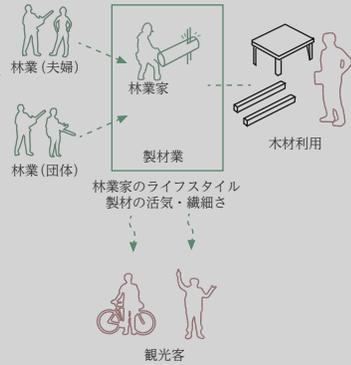
1階平面図 1:1000



川上から木材産業をつくるための建築

木を切る林業家が自ら丸太を挽き直接供給できる製材施設を計画する。林業家と木材利用者との接点生まれれば、樹木の知識や森林の状態を踏まえた活用に積極的に携わることができる。

その生産の在り方を開くことで、林業の町としての風景が立ち現れ、観光で訪れた一般の人が地域の材に触れるきっかけをつくる。

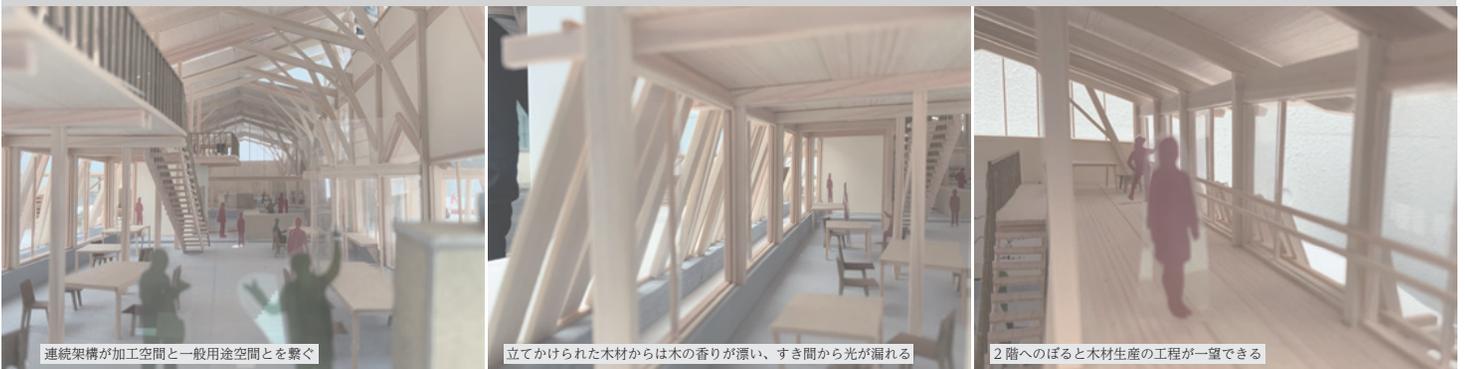
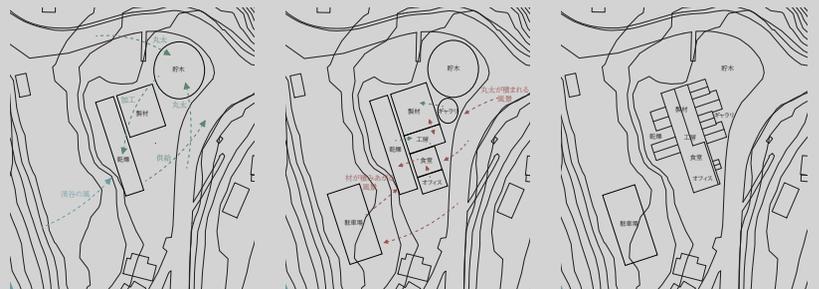


生産工程を取り巻く体験と軸線

木材の加工を貯木・製材・乾燥に分類し工程をつくる。

生産工程に観光客の体験を結び付けていく。

製材から一般空間までひとつの軸で連続性をつくり、動線・視線から直交する軸を挿入する。



連続架構が加工空間と一般用途空間とを繋ぐ

立てかけられた木材からは木の香りが漂い、すき間から光が漏れる

2階へのぼると木材生産の工程が一望できる

南北断面図 1:300

